

# 交流活動を学力向上の取組と連携させる異校園連携の取組

— 幼保小中連携の実践的な取組から得られつつあること —

小柳 和喜雄

Wakio Oyanagi

奈良教育大学大学院教育学研究科

School of Professional Development in Education, Nara University of Education

## 1. はじめに

幼保小連携、小中連携、小中一貫教育など異校園が連携しながら、小1プロブレム、中1問題と言われる課題へ対応すること、また義務教育終了までその中学校区で中長期的な見通しをもって学校・保護者・地域が連携して教育効果のある取組にあたることと言われてすでに久しい。平成22年7月で第5回を数える小中一貫教育全国サミットにおいても、そのテーマを「施設分離型小中一貫教育の課題を探る」と定めるなど、これまで施設一体型や併設型の小中一貫教育を中心とした取組の報告が多かったことに対して、その取組の範囲を拡大して検討をしている。また小中一貫教育などの取組を、市町村の目指す教育ビジョンを達成していく1つの重要な柱に位置づけるなど、ある特別な学校区だけで行われる取組とは異なる位置づけをし始めている。これらの動きは、異校園の連携をより強く打ち出してきた

幼稚園教育要領、学習指導要領の改訂、その完全実施が目の前に来ていることなども影響してきていると考えられる（図1参照）。

そこで、ここでは、その学校園の立地として互いに離れている中で、効果的な連携を進め、教育効果を上げようと試みているいくつかの取組に学びながら、施設一体型や併設型の取組とは異なる環境下にある連携教育の手がかりを見つめていく。

## 2. 連携・一貫教育の取組の変化

まず連携・一貫教育でこれまでよく見られた取組を振り返ると、そこには大きく2つがあった。

1つ目は、「教科指導等に連携・一貫の力点を置いている場合」である。これは、さらに、3つに分かれ、1) 小中学校に共通の新たな教科・領域を設定し、それと関わって小中一貫・連携を進めていく取組の場合。2) 小中学校の既存の取組のうち、ある学習活動と関わる「教育内容」に焦点化して小中連携・一貫を進めていく取組の場合。例えば、外国語、算数・数学、体育など既存の教科に焦点化した取組、ものづくり、食育、図書館利用と読書活動、全ての教科における言語活動の充実（各学年の取組ポイント等を体系的に）ほか、教科横断的な取組、3) 小中学校の既存の取組のうち、学習活動と関わる「教育方法」に焦点化して小中連携を進めていく取組の場合。例えば、出前授業・協同授業・TT、定着支援

取り組みの背景	①中1問題に対するゆるやかな接続、②学力向上への寄与、③成長の実態に即した学校階梯の再考、④地域理解・連携の必要性、⑤自己理解・他者理解・縦集団との出会いの必要性、⑥学校適正規模・統廃校・校舎改築などの理由、⑦市町村の教育ビジョンに沿った取組
9年間の指導体制	①校舎一体・併設・隣接の場合（新たな学年ブロックを用いる、用いない）、②校舎が離れている場合（内容・方法連携・交流・家庭学習支援）
取り組みの特徴	①外国語・英語・国際系、②地域系、③人権・道徳・特活・進路融合系、④ものづくり、⑤健康・食育系、⑥情報・コミュニケーション系、⑦読解力などある力の獲得へ焦点化、⑧交流学习
現状及び成果	①子どもの学校生活面の改善、②学力向上への寄与、③教員組織の変化（手ごたえ）、④前年度からの全体計画の策定、⑤指導方法の連携・情報の共有、⑥出前・合同授業の実施、異学年・異なる学校の子どもの交流、⑦校区連携会議の設置、⑧小中一貫コーディネータ、あるいはチームの設置と研修と情報交換の場の設定、⑨兼務体制の明確化、⑩地道な広報活動による小中一貫・連携教育の意味の一層の啓発
課題	①会議・打ち合わせ時間の確保、②学力向上、生活面の変化などに関する継続的な評価、③環境・設備・人的配置など移行期に伴う課題への対応：校務分掌の見直し、連携校型の学校での取組みへの一歩・継続性、小小連携、④教科部会設置などによる教科カリキュラムさらなる連携、⑤取組の外部評価

図1 平成22年度の小中一貫の教育取組動向の概略

の方法の連携（朝の時間、小テストなどの活用、子どもたちに問題やテストを作らせる、必ず自分たちで考え表現する時間を確保する。効果的なノートの活用・作成を指導する、ほか）、教育機器の効果的な活用の連携、学習個人カルテの作成による指導情報の共有、等の取組が行われてきた。

2つ目は、「特別活動等に連携・一貫の力点を置いている場合」があげられる。例えば、体育大会、文化祭、遠足ほか、様々な行事等を活用して交流活動を企画するなど、そこを要として小中連携を進めていく取組があげられる。部活動の説明会・体験、授業体験、ある年齢や学年の交流（幼と小1、幼と小5、幼と中1、小6と中1）などが、その例である。

それが、先にも述べたが、立地が離れた学校園で連携・一貫教育を進めていく取組が色々と検討されてくる中で、3つ目として、「家庭学習支援等を要として連携・一貫を考えようとする取組」も始めてきた。

例えば、奈良市平城西中学校区は、2小1中の中学校区で、1小1中の一体型や併設型とは異なる、様々な中学校区でよく見られる立地環境にある学校区である。そこでは、奈良市の方針に基づく新設3教科を3校で計画的に取り組むことや、3校の交流活動も計画的に進め一貫教育に取り組んでいる。さらにこの学校は、「学びの手引き」という冊子を小中学校の教員で話し合いながら作成し（中学校入学前に求められる学習活動や中学校に入学してからの学習活動など、教科ごとに記載されたモノ、ほか）、それを、3校で実際に活用し、その利用について評価改善をする取り組みを進めている。これまでも中学校で学習の仕方に関する手引きを作成し、指導に役立てようとする取組はあったが、小学校教員と一緒に作成し、両学校種で一緒に活用してどのような取組はあまり見られなかった（図2参照）。



図2 学校の立地が離れている中学校区（2小1中）の取組例

この取組は、学校の立地が離れていて、しかも複数あり、教員の移動による出前授業なども難しく、また児童生徒の交流活動などもなかなか難しい中学校区であっても、手引きの作成を通じて情報交換を行い（学習内容、つまずきやすいところ、授業方法、子どもに関する情報など）、それを実際に活用して、学習活動の支援や家庭学習支援を行う、連携・一貫教育の1つの方法を示してくれているといえる。

### 3. 交流活動を学力向上へ活かす取組

次に、紹介する取組例は、立地が離れている中学校区の幼保小中連携に取り組んでいる興味深い取組である。

図3に示すA市は、市をあげて学力向上等に取り組む1つの重要な方法として異校園連携を積極的に

### A市4中学校区の幼保小中連携の取組

	○中学校区	△中学校区	□中学校区	◎中学校区
取組指針と目指す子ども像	コミュニケーション能力を高める。学習、生活、人権。自らを愛し、他を愛する心豊かな子ども	コミュニケーション能力の向上と基礎学力の充実。互いに伝え合い、高め合える子ども	一人ひとりを大切にす子どもを育成。一聴き取る力の育成	基礎基本の確実、自ら考え、行動する子どもの育成（自らの思いを表現できる子どもを目指して）
研修・授業研究（つくり）	話す！聞く力を伸ばすための、授業・保育内での子どもへの接し方、子ども同士のつながりをつくる手立ての工夫。アンケートによる実態把握と系統表作成、変容確認	授業作り。学び合いを1つの観点としたコミュニケーション能力を育成する授業方法の検討、学級作り。学習・生活調査を活かした児童生徒間の関わり作り、先進校視察	聴き取る力の育成に向けた交流学習の工夫について。各交流の重なり合いなども振り返り、より意図的、計画的な交流活動に向けて先進校視察	異校園種間交流。転入教職員による異なる校園で1日研修。特別支援研修会
教員交流	合同研修、小学校区研修、中学校区内相互授業・保育研究、出前授業	合同研修、幼保交流、幼小担当者会議、中学校区内相互授業・保育研究、出前授業	合同研修、幼保交流、幼保小会議、中学校区内相互授業・保育研究、IT、出前授業	合同研修、幼保小会議、中学校区内相互授業・保育研究
児童・生徒交流	校区フォーラム。6年生中学校体験授業。5年生と年長児交流。4年生と年長児交流。2年生と年長児交流。1年生と年長児交流。地域の人と交流。*交流→コミュニケーション	中学生と年長児交流。5年生と年長児交流。3,4年生と年長児交流。2年生と年長児交流。1年生と年長児交流。幼稚園と保育園交流。隣接する小学校間交流	幼稚園と保育園交流。保育園年長と中学校中2と幼稚園、幼小中2と保育園。小中（6年と中）小3と幼稚園。小3と保育園。小1と幼保交流	人権フォーラム。3,4歳児と1年生。5年生と年長児交流。1年生と年長児交流。1,2,3年生と年長児。中学校体験。人形劇共同鑑賞。年長児小学校体験
課題	各取組の効果を上げる事前事後の話し合い	年間を見通した計画。連携を継続的に深める	子ども同士の学びを大切にす取組	学びの手引きの策定。保護者への情報提供

図3 各学校園の立地が離れている中学校区の連携教育の取組

### 「学びのてびき」について



平城西中学校区では、平成21年度より小中一貫教育に取り組んでいます。この「学びのてびき」は、その取組の一つとして、小学校の先生と中学校の先生が何回も話し合い、協力してつくったものです。中学校に入学するに当たって、特に学習や授業については、小学校と中学校の違いや難しさなどに不安や心配を感じている人もいます。そこで、そんなみなさんの気持ちが少しでも軽くなって、4月からの中学校生活のスタートが切れるようにと、この「学びのてびき」をつくりました。「学びのてびき」には、先生たちの「学習するときにはこんなことに気をつけてがんばってほしいな」という、みなさんへの願い、思いが詰まっています。今日から中学校入学まで、そして中学1年生のときも、いつも身近において、読んで、書いてあることを実行したりしていただきたいと思います。

### 「学びのてびき」の見方



- 【教科名とは】 各教科の学習内容の特徴が書いてあります。
- 【1年生になる前に】 中学校に入学するまでに身につけておいてほしいことが書いてあります。
- 【学習のアドバイス】 その教科を学習するとき気をつけてほしいことが書いてあります。
- 【家庭学習の方法】 家で学習するときの注意点が書いてあります。
- 【中学生になると】 中学校での学習内容や、小学校との学習内容の違いなどが書いてあります。





応し、これらの力を付けていくためには、関わる内容や関わる対象が必要となり、また学び合いを有効にしていくためには、このような力を意識的・計画的に付けていく試みが求められる。そこで、第3軸（図4のY軸）を立てて、そこに、教科指導と交流活動のそれぞれの取組を立体的に編み上げていくことになっていった。

そして、これを各教科指導等の中で、より活かし、その成果を見ていくために、図6のような言語活動の充実を意識した系統表などを作成し、中学校区の学力向上の取組の基軸として活かす（螺旋的・計画的に中長期的の視点をもつて育てていく視点）ことも行われるにいった。

現在、この市の全ての中学校区で、上記のような取組の全てが同じように行われているわけではない。しかしながら、各中学校区の中で活かせるところを活かしていく方向に動いている。

これら交流活動の財産をそれぞれ計画的に位置づけ、しかもそれを学力向上につなげていく試みは、似たような取組課題を掲げている多くの中学校区にとって参考になる取組であると考えられる。

#### 4. おわりに

以上、これまで、学校園の立地として互いに離れている中で、効果的な連携を進め、教育効果を上げようと試みているいくつかの取組に学びながら、施設一体型や併設型の取組とは異なる環境下にある連携教育の手がかりを見つめてきた。

そこには、出前授業や子どもの直接交流など時間を取って目に見える活動が、なかなか難しい場合でも、連携を行うことは可能であること。具体的には、実際に連携で活用する教材（例えば、家庭学習支援と関わる学びの手引き、ほか）の作成といった別の形で目に見えるモノを作成し、子どもたちの自律を

## 各教科・領域を通じて育てたい力の系統表及び指導計画表の作成

	体験の重点	聞くことの重点	話すことの重点	話し合うことの重点	読むことの重点	書く・表すことの重点	読書・メディア接 触の重点
幼稚園							
低学年					幼稚園	低学年	中学年
中学年				聴衆を増やす			
高学年				体験から感じ取ったことを、表現			
中1				体験活動を振り返る、学んだことを記述する			
中2/3				体験したこと、調べたことをまとめ、発表			
				意見の異なる人へ敬語、共同論議、意見のまとめ			
				事象の差違や共通点を記録・報告			
				比較・分類、関連づけ、帰納・演繹を用いた説明			
				仮説を立て、結果を評価し、まとめ、報告			

図6 中学校区全体で取り組む言語活動の充実と関わる系統表の作成

促す学習支援に役立てていくこと、その教材作成を通して様々な情報の交換や協働を築いていくこと、が可能であることを垣間見てきた。

また、様々な交流活動などを行ってきた歩みを持つところは、幼保小中連携の取組の指針や目指す子ども像を中学校区レベルで話し合い、ヴィジョンの共有によって、その実践をより計画的で組織的なモノにしていくことができること、さらに、子どもが身に付けた力の評価や手立ての工夫改善につながる系統表などを作成することで、この成果をそれぞれの学校やクラスで取り組んでいる学力向上へ関連づけて取り組んでいくことが可能であること、などを実践的取組の経過から学んできた。

立地として互いに離れている中で、効果的な連携を異校園で組んでいくことが、立ち上げの苦労はあってもやはり後々得るモノが大きいとするなら、上記の取組は、ある示唆を私たちに与えてくれていると考えられる。

#### 参考資料

< 異校園研究支援のページ >

<http://oyanagi-lab.com/ikouen/index.html>

上記 WWW に異校園連携に関する研究成果やハンドブックなどの資料が掲載されている

< 奈良市立平城西中学校のページ >

<http://www.naracity.ed.jp/heijounishi-j/7%20rennkei-ikkann/youshourennkei.htm>